

C-25 近在初期に於ける小袖の風俗史的研究(第3報) 文学礼書に現れた小袖
田中千代学園短大 三茅キミ子 とその染織について

目的 近在初期の小袖を法令上より観察(第1報)さらに風俗画の上より当初の豪華な服飾界を明細に考察(第2報)してきたが、今回は、文学、礼書の上に如何に展開し、被服構成や染織面の上に如何様に反映しているかについて研究してみました。

方法 資料としては假名草子の恨之介、竹齋物語、尤の草子、あづま物語、初期俳諧としては鷹筑汲集、望一右一句、毛吹草、隨筆類では八十翁昔語、大宰春俗の独語、曳尾庵のわが衣、女礼書では女鏡秘伝書、女室室記できるだけ当時の資料を活用し、併せて近在女風俗考、近在風俗志(宇真澄稿)、嬉遊笑覧を参考とした。

結果 戦乱から泰平への動きは先づ男の武弁段代な生活の中に平和の喜びを与え、近在初期はその衣性にも男に金襴綴子縹珍をもち、女性に紗綾綸子の世界をももたらした。その上染織方面では麻子に摺箔、縫箔をもち、次第に地無小袖と云うぜいたくなものにまで発展していった。大体三代將軍の寛永頃までは小袖の立派であったのは武家であったが正保、寶永頃から武家奉公の者も金拵の町人の毒までが次第に豪華なものを着ることとなり、ついには遊女や湯女にまで及んだことは、文学、礼書、隨筆の上でも大体第2報で報告した通りですが、このような初期小袖の豪華も明暦大火によって江戸は灰燼に帰して京都に発注される新しい小袖は豪華精緻さより斬新さと簡単に作りあげられる染織がとめられ寛文模様と云うぜいたくなものの出現とならざるを得ない事態を迎えざる状況にあることが痛感されました。